

嵇康卜疑試論

大上正美

一

三國魏末の反體制的思想家として刑死させられる嵇康(二三—二六二)は、詩・賦・書・論・箴・家誡・傳贊など、多様な文體で自己と向き合っている。本稿ではそのうちの一つ、『楚辭』の「卜居」の文體に倣った作品、「卜疑」をとりあげ、嵇康の文學營爲と思想の意味を問おうと思う。

「卜疑」については、「卜居」を踏襲するだけで獨創性に缺けるとする批評もあるが、それは作品の読みとりを疎かにした裁斷でしかないし、また嵇康の文學全體を見通した視野をもつ評とも思えず、そういう切り捨てからは何も出てこない。

筆者は「卜居」の文體に倣うことを、嵇康の自己對峙の一つの方法として捉え、それによって「卜疑」という作品の何が表現として獲得されたのかを見たいと思う。そしてその表現として獲得されたものを通して、嵇康の文學營爲における「卜疑」の位置づけをしておきたい。さらにできることなら〈文體〉なるもの、美文・駢文なるものが、表現者にとっていったい何でありえたのか、という表現史上の問題への視角の一端を、嵇康の「卜疑」を通しておぼろげながらも見出せるようでありたいともくろんでいる。

二

「卜居」は、屈原に名をかりた後人が、屈原を主人公として太卜の鄭詹尹に卜問させ、鄭詹尹がそれに答えるという問答體形式で展開させた作品である。序破急の三段構成になっていて、(Ⅰ)で、讒人によって退けられ、進退に窮した屈原が鄭詹尹を訪ね、とるべき處世の道を占ってもらおうとする。鄭詹尹が何を占えばよいのかと尋ねる。(Ⅱ)で、屈原は處世の悩みを、「寧A乎、將B乎」の疑問形で八箇條にわたって卜問する。さらに、人々が自分の廉貞の志を知ってくれない嘆きを鄭詹尹に訴える。(Ⅲ)で、鄭詹尹は「神も通ぜざる所有り、君の心を用ひ、君の意を行へ」と、屈原本人の強い意志通りの選擇を貫徹しようと勵まして、卜筮を行うことを辭退する。

この問答體構成の簡単な枠組からもうかがわれるのは、屈原が處世上の選擇に迷っているかのようにでありながら、しかし最後まで節操を生きぬこうとする信念が揺るがないことである。一貫しているだけではない、卜問を重ねてゆくことによって、その信念はより強固に確かめられてゆく。だからこそ鄭詹尹は占斷を下す必要がないわけなのであるが、そのことを効果的に表出しているのが、全體の昂揚部ともいえるべき(Ⅲ)の八箇條の卜問の列擧である。「寧A乎、將B乎」の二者擇一

のト問が累層的に示される「ト居」の文體のエッセンスを最初に確かめておこう。

第一箇條から、惱みは對比的に告白される。

①吾寧悃悃款款、朴以忠乎。

將送往勞來、斯無窮乎。

吾むしろ悃悃款款として、朴として以て忠ならんか。

はた往くを送り來たるを勞ひ、斯に窮すること無からんか。

ト問者屈原は明らかに、志を純一にして誠を盡くし飾り氣なく生きる前者Aをこそよしとし、後者Bという俗人におもねるように生きて決して窮することのない世渡りを拒否している。以下、いづれのト問もAかBかの選擇に關して、その是非は一見しただけで明らかかなものである。

②寧誅鋤草茅、以力耕乎。

將遊大人、以成名乎。

むしろ草茅を誅り鋤きて、以て力耕せんか。

はた大人に遊びて、以て名を成さんか。

③寧正言不諱、以危身乎。

將從俗富貴、以媮生乎。

むしろ正言して諱まず、以て身を危ふくせんか。

はた俗に従ひ富貴にして、以て生を媮しまんか。

④寧超然高舉、以保貞乎。

將呶呶慄慄、嘔呶喞喞、以事婦人乎。

むしろ超然として高く舉がり、以て貞を保たんか。

はた呶呶慄慄、嘔呶喞喞として、以て婦人に事へんか。

⑤寧廉潔正直、以自清乎。

將突梯滑稽、如脂如韋、以潔楹乎。

むしろ廉潔正直にして、以て自ら清くせんか。

はた突梯滑稽にして、脂の如く韋の如く、以て潔楹ならんか。

①③⑤は、(1)にいう世にあって「智を竭くし忠を盡くす」生き方に對して、あくどい生への批判。②④は、俗世から身を退く存在に對して、世に戀々とする者への批判。いづれも前者Aを是、後者Bを非とする選擇は明らかであり、判斷はすでに問いの中にあつた。

すべては確信に満ちている。「送往勞來」「成名」「從俗富貴」「媮生」「事婦人」の語をとりあげただけでも、俗世を斷固拒否する意志は絶對的である。唯一③で、正言してどこまでもはばからないために「身を危ふくす」苦しみが吐露される。一瞬の恐れがよぎるのは、八箇條のト問の中でこの二字だけである。あとはAを無條件によしとし、Bを無條件に退け、そこにはト問者のためらひも恐れもない。

そのト問が次々と積み重ねられてゆくことによつて、屈原の自己確信は壓倒的に搖るぎないものとなつてせり上がってくる。この感情の盛り上がりは、判斷が明解絶對であればあるだけ漸層的に相乗効果を生み、まるでト問者屈原自身が自らの信念と意志をより強固にするために次々とこぼを吐き出しているかのようである。「ト居」の作者のねらいもそこにあり、「ト居」の文體の効果もそこにある。それを支えているのが、表現面での單純性である。④⑤⑥を除いた五箇條に於て、AとBとは句數と字數がそれぞれに對應している。また⑥以外はすべて單一の押韻である。それら單純な對應であればあるだけ、屈原の揺らぎようのない意志とすつきりとした感情を讀み手に傳えるのに効果的に働いているといえる。

④⑤は、「將B乎」に於て四言一句分が多くなつてはいるが、この

ことがまた、否定の熱性をより激しくする。一句増えた箇所において、Bで現實嫌惡の感情が露骨に表現されているのである。「呢。皆。②(㇀㇀) (慄斯) ③(㇀㇀)「嘔。呻。嘯。呢。④(㇀㇀㇀㇀)「突。梯。⑤(㇀㇀)滑。稽。⑥(㇀㇀)」と擬聲語を重ねた生理的反撥や、「如脂如草」の生々しく肌こびりつくような觸覺イメージが、現實嫌惡の情をいやが上にも驅り立てる。このように句數を増して對應させることによって、單なる是非の判断にとどまらず、後者Bの俗惡なる世への痛罵が露骨になり、否定の熱性が激しく生理的に高められる。その分餘計に前者Aの生の絶對的正當性が保證されてゆくのである。單純で正確な對應を示す八箇條の間に、④⑤、さらに次に見る⑥が配置されているのは、「下居」の作者の巧みな工夫と言うべきであらう。

⑥⑦⑧は、「千里之駒」と「水中之鳧」、「騏驎」と「鴛馬」、「黃鶴」と「雜鷺」とが對比される。

⑥寧昂若千里之駒乎。

將汜汜若水中之鳧、與波上下、偷以全吾軀乎。

むしろ昂昂として千里の駒の若くあらんか。

はた汜汜として水中の鳧の若く、波とともに上下して、偷も以て

吾が軀を全うせんか。

⑦寧與騏驎抗軀乎。

將隨鴛馬之迹乎。

むしろ騏驎と軀を抗げんか。

はた鴛馬の迹に隨はんか。

⑧寧與黃鶴比翼乎。

將與雜鷺爭食乎。

むしろ黃鶴と翼を比べんか。

嵯康卜疑試驗

はた雜鷺と食を争はんか。

⑥は④⑤を受けて、「與波上下、偷以全吾軀」の二句が増えている。水中の鳧の、群れをなして波間に浮かぶよるべない生が、俗人の生を全うする輕侮すべき處世の比喩となつて、よりありありと具體的に嫌惡されているのは、④⑤をうけつぐ効果である。そのあとに再び單純な對應の⑦と對句の⑧がおかれ、高貴な生と凡庸な生のイメージの對比の中から、屈原の孤高の矜持がさらに明確になる。

以上のように、「下居」という作品は、その設定と構成、「寧A乎、將B乎」の疑問形、單純に對應する句數と字數、それをほみ出すようにしてぶつけられる俗世嫌惡の感情の放出、等々の表現を通して、屈原の生の絶對的正當性が壓倒的に奔出する構圖になっているのである。以上を「下居」の文體の特色として指摘できるのであらう。

三

「下居」の文體に倣いつつ、では嵯康の「卜疑」がそれをどのよう
に自己對峙の方法としてしているかについて考えてみよう。

「卜疑」も「下居」と同じく、卜問する人宏達先生と、占う人太史
貞父との問答體による三段構成をとっている。(I)では、宏達先生の本
性と思想が紹介されたあと、嚴しい時代認識を抱いて生きていかなけ
ればならない苦惱が語られる。宏達先生は太史貞父を訪ね、占つても
らおうとする。貞父が何を占うのかと尋ねる。(II)では、宏達先生の卜
問が、計十四箇條の「寧A乎、將B乎」の二者擇一の疑問形によつて
續けられる。さらに、時代に孤立せざるを得ない嘆きが訴えられる。
(III)では、聞いていた貞父が卜占を行わず、宏達先生の老莊的生のあり
ようを稱えつつ、「人間の委曲を憂」うることに励まされる。

右の構成から見ても、そっくりそのまま「卜居」の文體を階襲していることが分かる。特に「卜疑」の場合も(Ⅱ)の十四箇條の卜問の文體の中にこそ、作品の感情と思想の頂點があると考えられるが、その前にそれとの關連の上からも、(Ⅰ)の設定についてみておく必要がある。

「卜居」全體三三〇字に對し、「卜疑」は八四五字と分量的にも多くなっている。(Ⅰ)が六〇字に對して二三五字、(Ⅱ)が一〇七字に對して五二五字、(Ⅲ)が五三字に對して八五字である。(Ⅲ)は卜問が増えた分字數が多いのだが、(Ⅰ)の宏達先生を説明する部分が屈原と比べて多いのがきわ立つ。架空の宏達先生と命名されることによつて、屈原という實在の名がひきずつてゐる先驗性から読み手は解放たれてゐるが、その分宏達先生の内なる世界がことは多く語りはじめられなければならない必要があるのである。

「宏達先生なる者有り、恢廓たる其の度、寂寥として疏闊たり」と、宏達先生の本性、思想、内なる世界が語りはじめられる。そこでは『老子』の「聖人は方にして割せず、廉にして劓せず」(五十八章)や「聖人は」褐を被て玉を懷く」(七十章)をはじめとする句や、『莊子』の「機心」(天地篇)、「純素」(刻意篇)、「天地一指」(齊物論篇)などの語を次々と列擧して語られ、宏達先生は何よりも老莊思想の持ち主として、人間にあつて「交はるも苟も合せず、仕ふるも違するを期せず」と設定されている。

ただ注意すべきは、同時に「常に忠信篤敬もて、直道にして之を行はんことを以爲ふ」と表現されている點である。言うまでもなく『論語』衛靈公篇にいう「忠信にして篤敬」や「直道にして行ふ」などをそのまま引用して、宏達先生が一途に「忠信篤敬」の生をめざし、社會と誠實に向き合つた儒家的精神をもつていとされるのである。こ

の宏達先生の老莊的なものと儒家的なものとの關わりについては、老莊思想を志向しつつ、たとえば武田秀夫氏がいうように、老子とも莊子とも「やはり幾分違つた地點に立」つていて、「社會から逸脱、超越したままの人でない」とおさえておくのが穩當であるようだ。筆者はその思想の内實をめぐつては、それ以上議論することにそれほど關心がない。老莊的なものを一貫して志向しながら、同時に時代との關わりを第一義的に自己の課題とした人物として理解しておいた上で、そういう人物を設定した文學的な意味を考察することの方が重要だと考えるからである。

宏達先生の紹介がなされたあと、續けて大道隠れた世の現状が語られる。

然れども大道は既に隠れ、智巧滋いよ繁く、世俗は膠加し、人情も萬端なり、利の在る所、鳥の鸞を追ふが若し、富みては爲に竊ひを積み、貴きは爲に怨みを聚む、動く者は累ひ多く、靜なる者こそ患ひ鮮なし、爾乃して丘中の隱士の、川上に竿を執るを樂しむを思ふ。是に於いて遠く念ひ長く想ひ、超然として自失す、鄙人は既に没すれば、誰か吾が質を爲さん、聖人を吾は見るを得ざれば、之を數術に聞かんことを冀ふ。

大道隠れた世にいかんか、隱者となつて生きるのが最善なのかと悩む、自失した自己、孤立した自己が、いつしか一人稱的に語られる。右の引用の最後には、鄙人が亡くなったことを嘆いた匠石の語が引かれていて、無二の親友がいない、また聖人を今の時代に見ることができない、そういう同時代的孤立に耐えられない故の卜問動機が述べられている。

ところで今われわれが、理想と内なる世界を確立してゐるはずの體

道者という設定であるのに、にもかかわらずなぜに宏達先生は自失せざるを得ないのか、と素朴に問うことは少し先ばしすぎる。なぜなら、老莊的世界を志向して生きる彼の信念は、同時に時代から超然としたものでは決してなかったことが強調されてあったればこそ、大道隠れた時代の中で當然自失せざるを得ないからである。従って宏達先生を自失へと追いつめたのも、時代への契機を内包する彼の内なる世界と時代との軋轢、つまりは彼自身の動かしようのない時代認識そのものであった、と理解すべきであるだろう。

ここには、「下居」の屈原の惱みと少し異なるものがうかがえる。屈原は(Ⅰ)で「智を竭くし忠を盡くすも讒に蔽鄣され、心は煩ひ慮は亂る」と設定され、(Ⅱ)で「世は濁濁して清まず、……讒人高く張り、賢士名無し」と告白するが、屈原にあつては現状への嫌悪と嘆きがひたすら強調されていけばよかつたのだと言える。このように問題は屈原の外にあるのであり、自失の因が主として自己の時代認識自體にあると設定される宏達先生とは微妙に差がある。かと言って宏達先生はその時代認識を捨てることはできない。この時代認識をかかえて生きる眞の苦しさの中に、宏達先生は設定されているのである。

今は大道隠れた世だとする時代認識は、密康が哲學論文や詩の中でくりかえし語るところであつた。

- 下逮德衰、大道沉淪、智慧日用、漸私其親。 (太師箴)
- 及至人不存、大道陵遲、…… (難自然好學論)
- 撫心悼季世 遙念大道運 (五言詩三首) 其三
- 施報更相市 大道匿不舒 (答二郭詩三首) 其三

密康にあつてはこの時代認識こそが、自己を多様に見直し、表現へと驅り立てる基點となつたものである。ただし、「卜疑」における宏

達先生の設定には、論や詩とはおのずと自己をみつめる、そのみつめ方の關心と方法が異なるようである。この時代認識を歴史的に檢證しようとする「論」の論理的營爲は一應おくとして、時代認識が詩的衝迫力の源泉となつている「述志詩」との差を簡単にではあるが確かめておこう。

述志詩二首 其一

- 1 潛龍育神軀 潛める龍は神軀を育て
- 2 濯鱗戲蘭池 鱗を濯ひて蘭池に戯る
- 3 延頸慕大庭 頸を延して大庭を慕ひ
- 4 寢足俟皇羲 足を寝めて皇羲を俟つ
- 5 慶雲未垂景 (されど)慶雲 未だ景を垂れざれば
- 6 盤桓朝陽陂 朝陽の陂に盤桓す
- 7 悠悠非我匹 悠悠たるものは我が匹に非ず
- 8 疇肯應俗宜 疇か肯へて俗宜に應ぜん
- 9 殊類難徧周 殊類のものは徧周し難く
- 10 鄙議紛流離 鄙議は紛として流離す
- 11 轆軻丁悔吝 轆軻 悔吝に丁り
- 12 雅志不得施 雅志 施すを得ず
- 13 耕耨感寧越 耕耨は寧越を感ぜしめ
- 14 馬席激張儀 馬席は張儀を激すといふ
- 15 近將離羣侶 (されば)近きて將に羣侶を離れ
- 16 杖策追洪崖 杖策して洪崖を追はんとす

(全26句中の前半16句)

引用を省略した後半に語られる彼をして神仙へのひたすらな意志へと驅りたてるものこそ、12句までの混沌とした困難な時代であるとす

る現状認識であり、平素の志を全うできない悔いである。13・14句で、逆境をバネにして生きた寧越や張儀への共感を表明することによって自身に發憤のエネルギーをよびよせる。そして彼の激しい意志は、神仙への意志として、15句以下、後半部で具體的に描出される。

このひたすらな意志、志向性が嵇康の言志の一樣相を示しているのだが、「卜疑」の宏達先生とはよって立つところが違ふ。宏達先生は隱遁志向を表明しながら、現實嫌惡の情の激しさによって一氣に自己昇華する衝迫力に身をまかせるといふことはない。まずは自失した自己に關わり、自己がよりどころとするものをさがす揺れの中に、宏達先生が設定されてある。従つて隱者や神仙が絶對的な存在として喚びよせられたのでなく、それをも選擇肢の一つとして視野に入れつつ、自得できる自己を求める、その運動域の場を嵇康は宏達先生に與えたかのである。「述志詩」は現實への激しい嫌惡と強固な意志によつて當爲のイメージが即自的に喚びよせられる文學營爲の産物であり、その意味では「卜居」の屈原に近いと言える。それに對して「卜疑」の場合は、時代への嫌惡に即自的に身をまかせるといふのではなく、現實のなかに對自的に立とうとしている宏達先生がいて、それゆえにこそ處世に悩んでいると理解すべきであらう。

四

作品の昂揚部は、「卜居」の八箇條の場合と同じく、(II)の十四箇條の卜問にある。「卜居」に比べ、卜問の數が大幅に増えているが、問題はそれにとまらなない。一つ一つの選擇に關して是非の判斷がつかないものが多くなり、二重三重に複雑化した卜問になつていたのである。そこでは、四言句を基調にして句數が増え、換句對も目立ち、頻

繁に押韻し、美文化・駢文化を認めることができる。それらのことを卜問に即して見なければならぬ。

はじめの四箇條は、「卜居」と同じく、「寧A乎、將B乎」の前者Aを是、後者Bを非とするのが明白な卜問である。

①吾寧發憤陳誠、讒言帝庭、不屈王公乎。

將卑儒委隨、承旨倚靡、爲面從乎。

吾むしろ憤りを發して誠を陳べ、帝庭に讒言して、王公にも屈せざらんか。

はた卑儒委隨して、承旨に倚靡たるをもて、面從を爲さんか。

②寧愷悌弘覆、施而不德乎。

將進趣世利、苟容儉合乎。

むしろ愷悌とたのしく(人々を)弘く覆ひ、(惠みを)施すも徳とせざらんか。

はた世利を進趣とめ、苟りに容れ儉合せんか。

③寧隱居行義、推至誠乎。

將崇飾矯誣、養虛名乎。

むしろ隱居して義を行ひ、至誠(の心)を推しすすめんか。

はた(惡言を)崇飾し矯誣して、虛名を養はんか。

④寧斥逐凶佞、守正不傾、明否臧乎。

將傲倪滑稽、挾智任術、爲智囊乎。

むしろ凶佞(のひと)を斥逐し、正を守りて傾かずして、否臧を明らかにせんか。

はた傲倪にして滑稽に、智を挾み術を任ひて、(權力者の)智囊と爲らんか。

①と④とは出仕した場合の處世をめぐる二者擇一で、①ではAが發

憤直言の士、Bが面従の人、④ではAが正邪を明らかにする生き方、Bが智術をつくすやり方である。また②と③とは、②が施すも控え目に生きるのに對し、世に迎合して生きる生、③が隱居して義を行うのに對し、世に出て虚名を求め生とがそれぞれ對比されてある。

①から④の是非は明白である。Bで「面従」「苟容」「偷合」「虚名」「智術」をはじめとする語が並べられ、大道隠れた世を無批判に容認し、その中で貪欲に生きている者たちが否定される。これはそっくりそのまま、「下居」で屈原が嫌悪し、終始斷面として否定し去ったのと同じ次元のト問である。ここでも判断はすでに問いの中にあつたと言つてよい。

判断の明らかたト問は、もう一箇所、中に⑤から⑧の四箇條をはさんだあとに見える。

⑨寧聚貨千億、擊鍾鼎食、枕藉芬芳、婉變美色乎。

將苦身竭力、剪除荆棘、山居谷飲、倚巖而息乎。

むしろ貨を聚むること千億、鐘を撃ちて鼎にて食し、芬芳のひとに枕藉り、美色のひとに婉變まんか。

はた身を苦しめ力を竭くし、荆棘を剪除し、山に居りて谷に飲み、巖に倚りて息はんか。

Aは現世における享樂の生、Bは苦しいながらも山林での隱遁である。Aを非とすることは明らかであるし、また(1)で宏達先生が隱遁への志向を語っていたから、Bを是とすることは疑いようがない。このAを否定しBを選択するのは、①から④での選擇を逆轉させたものであり、「下居」の中の屈原にはまったく見られなかつた選擇の仕方である。次に見るように判断の明らかでない⑤から⑧を列擧したあとでこの⑨を配置した敘述の中に、宏達先生の迷いと混亂が露呈されてあ

ると設定した嵇康の意圖が見えてくる。

屈原的判断が容易になされるのは右の五箇條にすぎず、あとの九箇條は判断がはっきりとしない。宏達先生自身が迷うか、宏達先生の決断に關して讀み手がそれを推測することを躊躇せざるを得ないかのト問である。また、決して選擇しようがない類のものである。ともかくBもしくはAを嫌悪する情が見えてこないのである。

⑤寧與王喬赤松爲侶乎。

將追伊摯而友尙父乎。

むしろ王喬・赤松と侶と爲らんか。

はた伊摯を追ひて尙父を友とせんか。

⑥寧隱鱗藏彩、若淵中之龍乎。

將舒翼揚聲、若雲間之鴻乎。

むしろ鱗を隠し彩を藏し、淵中の龍の若くせんか。

はた翼を舒し聲を揚げ、雲間の鴻の若くあらんか。

⑤は王喬・赤松子の隱に對して、伊摯・尙父の積極的生をおくが、後者の生を否定しているとは必ずしも言えない。ともにありうる生として措定しているとみるべきであろう。また⑥の「淵中之龍」と「雲間之鴻」とのイメージに託されたものは、大いなる是を與える存在であつて、「下居」の⑧における「黃鵠比翼」と「雞鶩爭食」との對應と比べてみれば、兩者の差はきわ立つ。

次の⑦⑧にあつては一段と複雑である。

⑦寧外化其形、內隱其情、屈身隨時、陸沈無名、雖在人間、實處冥冥乎。

將激昂爲清、銳思爲精、行與世異、心與俗并、所在必聞、恆營營乎。

むしろ外に其の形を化し、内に其の情を隠し、身を屈して時に隨ひ、陸沈して名無し、(されど) 人間に在りと雖も、實は眞冥に處らんか。

はた激昂して清(なる行ひ)を爲し、鋭思して精(なる思ひ)を爲し、行ひは世と異にするも、(されど) 心は俗と并はさり、所在必らず聞こえありて、恆に營營たらんか。

四言句を基調にすることに變わりないが、句數がきわめて多くなり、各項で換句對が増え、それだけ内容もまた複雑になっている。兩者ともに世にあつて、Aは消極的な老莊的生、Bは積極的な儒家的生的選擇である。しかし肯定的なAの言述にあつてもそのマイナス面がおさえられ、自分を失なつて死者のようにして生きてゆくのかと惱みを告げる。同じく肯定的なBの言述にあつてもそのマイナス面が述べられ、結局は俗人に従う心によつて必らず名聲を求め、あくせくと生きてゆくことになるのではないか、とのためらいが語られる。

⑧寧寥落開放、無所矜尙、彼我爲一、不爭不讓、遊心皓素、忽然坐忘、追羲農而不及、行中路而惆悵乎。

將慷慨以爲壯、感槩以爲亮、上干萬乘、下凌將相、尊嚴其容、高自度抗、常如失職、懷恨快快乎。

むしろ寥落開放にして、矜尙する所無く、彼我を一と爲し、争はず讓らず、心を皓素(の道)に遊ばせ、忽然として坐忘す、(されど) 羲農を追ふも及ばず、中路を行きて惆悵たらんか。

はた慷慨して以て壯と爲し、感槩して以て亮と爲し、上は萬乘を干し、下は將相を凌ぎ、其の容を尊嚴して、自らを高くして抗からんことを度る、(されど) 常に職を失ふが如く、恨みを懷きて快快たらんか。

ここでも四言句を基調としつつ、Aでは六言の對句が、Bでは五言の對句が挿入されている。Aは太古の素朴な生を追い求めるが、しかしそれを目指しながらも、路の途中で悲しむ姿が描かれる。Bは慷慨の士として世に志を貫く誇り高い生が目指されながら、しかし不遇で用いられず、恨み心を抱き續ける苦しみが述べられる。

このように⑦も⑧もともに、AとBの双方に當爲の生が描かれ、しかもそれぞれにその生を選択して生きることへの不安とためらいが示される。AにあつてもBにあつてもその正負がはかられているのである。もつとも負にためらいながらも、是なる生として自己の前に位置づけていることには變わりない。しかし無條件にAを、あるいはBを選びとるといふ自信がなくなっているのである。

もはやここまでくると、安達先生は自己の正當性を信じて疑わない屈原の生とはほど遠い。安達先生は屈原の生を是としながらも、屈原のように俗世への嫌惡を激しくすることによつてその意志を絶對的にするのでなく、そこに立ちどまり、時にはたじろぎ臆する。屈原的生の先にある可能態としての生の幅を多様に見据えようとしている。しかもその當爲の生を貫くことへの不安やためらいさえ隠さない。安達先生はあるがままの自己に誠實に向き合っているというのだが、それは言ってみれば、安達先生が自身のおかれた現實の次元にしっかりと足をつけようとしているといふことでもある。現實の俗世への嫌惡を強くすることによつて自己は即自的に自立できる、といふふうにはもはやいかなないといふことである。嵇康はそのように安達先生を設定しているのである。嵇康には、屈原が拒絶した先に前提された全き生といふふうには見えてこない。そういう地點に安達先生を立たせたのである。「下居」の中間にあつてはBへの拒絶が露骨で、生理的なこ

とばで激しく表現されてあったが、「卜疑」では①から④や⑨の判断の明らかなた問でさえ、「卜居」に比べればそれほどでないのもうなすけよう。

後半には歴史上の人物への共感を示す卜問が續けられる。すでに⑤で王喬・赤松子と伊摯・尙父とが對比されてあったが、迷いが逆轉した⑨のあとをうけた⑩から⑭には、歴史上の人物の具體的な生が對比され、次々と重ね合わされてゆく。「卜居」の後半で具體的イメージで對比されていたのに對應するところであるが、「卜疑」にあつては、その歴史上の人物への關わりは兩者ともに是なのである。

⑩寧如伯奮仲堪、二八爲偶、排擯共繇、令失所乎。

將如箕山之夫、潁水之父、輕賤唐虞、而笑大禹乎。

むしろ伯奮・仲堪の如く、二八偶を爲し、共・繇を排擯して、所るところを失はしめんか。

はた箕山の夫、潁水の父の如く、唐・虞を輕賤して、大禹を笑はんか。

⑪寧如泰伯之隱德、潛讓而不揚乎。

將如季札之顯節、義慕爲子臧乎。

むしろ泰伯の德を隱し、潛かに讓りて揚げざるが如くせんか。

はた季札の節を顯はし、義は子臧と爲るを慕ふが如くせんか。

⑫寧如老聃之清淨微妙、守玄抱一乎。

將如莊周之齊物變化、洞達而放逸乎。

むしろ老聃の清淨にして微妙、玄を守りて一を抱くが如くせんか。

はた莊周の物を齊しくして變化し、洞達して放逸なるが如くせんか。

⑬寧如夷吾之不委束縛、而終成霸功乎。

將如魯連之輕世肆志、高談從容乎。

むしろ夷吾の束縛を委まずして、終に霸功を成すが如くせんか。

はた魯連の世を輕んじ志を肆ままして、高談して從容たるが如くせんか。

⑭寧如市南子之神勇內固、山淵其志乎。

將如毛公蘭生之龍驤虎步、慕爲壯士乎。

むしろ市南子の神勇ありて内に固くするが如く、其の志を山のごとくたかく淵のごとくふかくせんか。

はた毛公・蘭生の龍のごとく驪り虎のごとく歩むが如く、慕ひて壯士と爲らんか。

⑮の伯奮・仲堪たち八愷八元の賢臣に對して、許由・巢父の隱者。

⑯の國を讓り身を隱した周の泰伯と、吳の季札。⑰の老子に對して、

莊子。⑱の不遇の時を恨まず、やがて桓公の霸に功のあつた管仲に對して、海上に身を隱し、思うがままに生きた魯仲連。⑳の勇氣を内に

隱した市南宜僚に對して、國難を救つた壯士の毛遂や蘭相如。

㉑㉒には、相對立することが明白な生が對置されている。㉑はと

もに隱遁をめぐつてだが、德を隱してひそかに國を讓るのと、節義の

人との微妙な差である。㉒にあつては老子と莊子が、思想的にみて

當時どの程度その差が認識されていたかについて慎重でなくてはいい

ないが、いずれにせよこれらの卜問は、相對立するものであれ、微妙

な差のものであれ、ともに是なる生ととらえられていることに變わり

なく、選擇のしようがないものである。

二者のうちどちらをというのでなく、言いかえれば二者のうちの一

つの具體的な姿を專一に慕うというのでなく、當爲の生の二つの可能態として、自己の前にそれぞれに披瀝してみせた。従つて主意は、それらの生のとつき従おうとする切實さにあるのでなく、歴史的人物への共感によつて自己の現在に立ちどまつたことの方にある。

この歴史上の人物を次々に列擧するというのは、表現者密康がとりわけ好んだレトリックで、當爲としての生や精神を自在に語ろうとするときしばしば有効的に用いられた。また十四箇條の卜問のあと、續けて宏達先生が惱みを吐露するときにも人物が列擧されるが、ここにあつては「時移り俗易はり、貴を好み名を慕ふ」という認識が再び確認されることになる。従つて柳下惠に位を譲らなかつた臧文仲、董仲舒を退けた公孫弘、賈誼をそしつた周勃と灌嬰らといった否定的人物が擧げられ、近い時代認識で把握されていて批判的である。

この歴史上の人物への共感に關して「卜居」と比較してみるなら、屈原は同時代的に孤立しているばかりか、歴史的にも孤立していたと言へる。しかし自己の正當性は生のエネルギーとして確認されてゆき、「吁嗟 默默たり、誰か吾の廉貞を知らん」との嘆きは、同時に孤高の誇りの表現となつた。それに對して宏達先生の場合は友人もない、聖人も見えないことを恐れ、歴史的に決して孤立しないように是なる人物を喚びよせていて、孤立の矜持からは遠い。自己の正當性や孤高の誇りによつて定立する自己というものを、屈原のように信じられないのである。

右のことについて、密康の文學の一つの到達——孤立を恐れず、眞に自立することを求める精神——からの距離をおしはかつておいてよいだらう。密康は「答二郭詩」の中で、同志でもある郭兄弟と別れるにあたり、彼らの厚い友情から發したことをじりを厳しくとらえ、そ

こに潛む現状認識の甘さを糾弾していた。ここには、激しく固有の他者を自己に對峙させることによつて自立への契機を目指す密康の精神がある、と筆者は考へるが、この孤立を自ら求めるようにしてまで自立せんとする嚴しさが「卜疑」の宏達先生には見られない。密康はどのようにして宏達先生を設定してないものである。

宏達先生が生との現在と行く末を檢證しているということは、熱い共感を含めて彼らを列擧したあとに、今後の課題として、他の誰でない自己に固有の生が待ちうけているということに他ならない。これが論理としての必然である。そのことに關して宏達先生にあつては無意識であるが、しかし密康が無自覺であつたとは言えない。なぜなら、太史貞父に卜筮を辭退させているのであるから。宏達先生を設定することによつて、途方もない戦いの前に自己を立たせること、これが「卜疑」における密康の表現の位相ではなかつたか、と筆者は考へる。

確かに、この途方もない戦いの前でその重さにたじろぐ密康の苦澁を、「卜疑」からうかがい知ることとはそれほど容易でない。それはあくまでも論理としての必然でしかなかつたし、また卜問に對して答へを用意しないのも做つた「卜居」の文體であつたからである。そうなのではあるが、ただ宏達先生の心のゆらぎに、わずかではあるがそのことを感受する豫感を讀みとつてもよいのではないか。⑦と⑧の卜問に見たあの精神のゆれとためらいは、やはりただものではないように思われる。

五

以上「卜疑」には、世俗批判の先にあるありうべき生の幅が、具體的にして多様な處世の型としてその正負をも見のがさずに提示されて

あった。ただしそれは宏達先生という登場人物によって提示されたものである以上、言うまでもなく作者嵇康の單なる内面告白に終わるものではない。確かに宏達先生は嵇康の分身には違いないが、それは必ずしも嵇康一人に局限されるものではなかった。嵇康をはじめとする、俗悪な現状批判の精神を持ち續けた當時の醒めた知識人に通底する問いのすべてを内包し、それを基盤とするものではなかったか、と筆者は考えるのである。

そもそも宏達先生という命名に關しては、それまでの「宏達」の語感と嵇康のそれとはずれることを確認しておかなくてはいけない。たとえば『文選』には、班固「西都賦」(卷一)に見える。

又有承明・金馬、著作之庭、大雅宏達、於茲爲羣。

「大雅宏達」とは、大雅の材と博學達識の學者をいう。その李善注には、『漢書』東方朔傳を引く。

方今公孫丞相、兒大夫、董仲舒、夏侯始昌、司馬相如、吾丘壽王、主公偃、朱買臣、嚴助、汲黯、膠倉、終軍、嚴安、徐樂、司馬遷之倫、皆辯知閑達、溢于文辭。

ここでは公孫丞相以下十五名を「皆辯知閑達」といい、その智辯の廣さを稱揚している。また『文選』にはもう一例、嵇康より少し時代は下るが、陸機「漢高祖功臣頌」(卷四十七)に

曲逆宏達、好謀能深。

と見え、曲逆侯陳平が廣く物事に通曉していたとする。

以上の三例に見える、金馬門に集う人、武帝が東方朔に向かつて賢材として名をあげた人たち、及び漢初の陳平のようなイメージを、「卜疑」の宏達先生のそれに重ね合わせることは到底できない。(1)で單なる物事に廣く通じた人という意だけでなく、時代との関わり的な

かで言えば反俗の人として理解されている以上、世間に受け容れられる存在とする従来の意味には、嵇康は設定しなかったはずである。

ところで嵇康の兄嵇喜は「嵇康傳」の中で、嵇康を「曠邁不羣」といい、「超然獨達」といつている。

喜爲康傳曰、家世儒學、少有偉才、曠邁不羣、高亮任性、不修名譽、寬簡大量、……超然獨達、遂放世事、縱意於塵埃之表。

〔三國志〕王粲傳注

「宏(曠)達」の語を直接使っていないが、「宏達先生」にそのまま通じると見てよい。また注目しておきたいことは、阮籍その人を語るときにもち出される「宏達」の評語である。

宏達不羈、不拘禮俗。

〔世說新語〕德行篇注引『魏氏春秋』

この一文、『三國志』王粲傳注が引くところでは、「宏達」を「曠達」に作る。いずれにせよ禮俗にとらわれず、意のむくままに行動する自由人として阮籍がとらえられている。資料が少しのちの『魏氏春秋』であるから、反俗が強調されすぎ、七賢のイメージを過度に付與した評價であったかも知れないが、しかしそれを差し引いても、宏達先生を考える上で参考にするべきだろう。もちろん宏達先生は阮籍をモデルにしたというつもりはないが、しかし嵇康自身をも含みつつ、阮籍らにも通底する、同時代に同じ課題を背負って生きる存在として宏達先生が發想されている、と言つてよいのではないだろうか。少なくとも従來の「宏達」の語がもつ意味合とは異なり、強烈な反俗意識をもち、その反俗の先の生をどこまでも主體的に生きようとした人物として設定されたと見なければならぬ。

ところで『晉書』何曾傳によれば、晉朝が成立したばかりの泰始の

初めの詔の中で、何曾が「明識弘達」と評されている。何曾は言うまでもなく、司馬昭の腹心で、鍾會とともに阮籍や嵇康を糾弾する先鋒である。そのほかならぬ何曾が王朝篡奪者から「弘達」と高く評價された。嵇康が設定した「宏達先生」といささかも關わることなく、一八〇度そっぽを向き合っている。ここにも嵇康がおかれていた眞に困難な情況がかいま見られるであろう。「今皇道開明にして、四海風のごとく靡く」時代だと押しつけてくる權力の前で、嵇康は自己の中に自己のことばを回復してゆく手立てを、その文學營爲の基點におかなくてはいけなかったが、この「宏達」の語などの中にもことばをとりもどしてゆく姿が見えてこようというものである。

ともかく宏達先生には嵇康や阮籍、その他の醒めた知識人に通底する處世のあるべき姿が重ね合わされるのだが、それは同時に、困難な現在に立ちつくすばかりの彼らにとって、しかし眞の困難はこの作品以後の、それぞれが独自の道を歩まなければならないことの中にある、という構圖を示しているであろう。言うまでもなく、司馬氏禪讓の茶番劇のただ中で、それぞれが岐路に直面し、嵇康には嵇康の、阮籍には阮籍の困難な道が横たわり、文學營爲のさらなる深まりが問われることになるのである。

六

高橋和巳氏が言うように、「文體というものは、いわば認識の坑道をささえる枠組のようなものであって、内に藏された精神の實は、その枠組の形状にそつてのみ外に出される。」今、本稿で考えたことを文體と作者の認識との關係で言うなら、「卜疑」は「卜居」の文體を方法とすることによって屈原的生を前提とすることができ、さらにそ

の先にある、時代に醒めた知識人一般に普遍する課題を設定することができたということである。またその普遍する次元へと一氣に引き上げることを可能にしたものこそ、美文の功なのであった。美文は何よりも普遍化をめざすものであったからである。

右のことはしかし、同時に「卜疑」の文體とその枠内での美文の限界でもあった。というのは、嵇康の文學が顯著にもつ個別性への深まりの道が閉ざされたままであるからである。宏達先生の設定の先には論理として自己の途方もない戦いが待ちうけているが、「卜疑」という作品の實態としてその困難の内實が、苦しみをもって十分に表現しつくされてあつたとは言えない、と四で考えたことも關係がある。

嵇康の多様な文學營爲に一貫するすぐれた言志性とは、やはり「幽憤詩」や「與山巨源絶交書」に見られるような、自己の資性にゆきつくほどに激しく執拗な自己剔抉の中にあつたと考えられる。その對自性を徹底させること自體の中から、時代に向けての攻撃性がそこには獲得されてあつたのである。

そういう言志性と比べるとき、「卜疑」が苛酷な時代を生きる知識人に普遍する廣がりを課題とした分、その一般性をつきぬける嵇康という個我の實存の軌跡からみて、嵇康の深まりが「卜疑」には缺けていると言わなければならない。その因は他でもない、「卜居」というステレオタイプ化された文體を方法としたことの中にすでにあつたのである。

「卜疑」という作品の到達と限界は右のようであるが、この實驗作を嵇康の文學營爲全體の見取り圖の上においてみると、嚴然たる存在意味を有していたことも強調しておいていいだろう。こういう文體を方法としたことの中に、確かに嵇康の文學的現在があつたのであ

り、この實驗作が表現者にとって必然でもあったからである。

「卜疑」の制作年代をめぐっては、確かなことは分らない。⁸³⁾しかし、「述志詩」と「幽憤詩」をめぐる言志の間に「卜疑」を位置づけることができる、と筆者は考えている。筆者は別稿で「述志詩」と「幽憤詩」の言志の様相の差について論じた。⁸²⁾本稿でも三で少し「述志詩」について觸れたが、「述志詩」の言志は、反俗の向こうにあるべき本來的な生が先驗的に存在し、それへのコミットを高らかに歌い上げるものであった。そこではあるべき自己へと自己武装のことがばが發せられるばかりで、それ以上自己は問われることがなかった。しかし、現實を否定した先に自己が自己でありうるというような単純な關係ではありえない情況を、嵇康は生きさせられた。従って、現實を拒否した先にあるべき世界が確固として見えてくるわけでは決してありえず、どこまでも反俗意識を抱えこんだあとの處世の難しさに直面させられたはずである。その内面の苦澁を阮籍の場合は「詠懷詩」群として残したのだが、嵇康にあっては詩はどちらかといえば、その感傷的吐露を抑制している。そして「卜疑」にあっては、しばしば直面させられる現實の前で立ち止まり、單なる告白に終わるのでなく、自己の内面にがまん強く、そして實驗的に立ち會ったのである。

従ってこの「卜疑」という作品の先に、「與山巨源絕交書」、さらには「幽憤詩」をおいてみるならば、嵇康の文學營爲のペースペクティブと、そしてその自己對時の深まりの構圖は、おのずと明らかになるはずである。

注

(1) 本稿が基にした「卜疑」のテキスト及び注釋に關しては、戴明揚

『嵇康集校注』(人民文學出版⁸²⁾)を主として用い、諸本を参照した。その後、殷翔・郭全芝『嵇康集注』(黃山書社出版⁸⁶⁾)と夏明劍『嵇康集譯注』(黑龍江人民出版社⁸⁷⁾)とが出版されたが、戴明揚校注を超えるものではない。また押韻については、于安瀾『漢魏六朝韻譜』を適宜参照した。

なお「卜疑」をめぐるわが國の專論には、次のものがある。

武田秀夫「嵇康思想の一視點——老莊思想をめぐって」『京都産業大學論集』16—4⁸⁷⁾

馬場英雄「嵇康における「自得」と「兼善」の問題について——「卜疑集」と「釋私論」——」(國學院大學『漢文學會々報』第三十四輯⁸⁸⁾)

馬場英雄「嵇康における「名教」問題と「卜疑集」について」(國學院雜誌)第九十三卷第九號⁸⁹⁾

峯吉正則「卜疑」(國學院大學『漢文學會々報』第十九輯⁷⁴⁾)

松浦崇「嵇康と楚辭」『中國詩人論 岡村繁教授退官記念論集』汲古書院⁸⁶⁾

前の三篇が思想の側から、後の二篇が文學の側からの接近である。いずれも教えられるところの多い論考であるが、嵇康の表現者としての位相を、「卜疑」の表現論的検討を通して全體的見通しの下に考えようとする筆者と、研究の立場を異にする。本稿と直接關連する筆者の別稿を左に記しておく。

a:「嵇康論(一)——絶交書二首に見る表現の位相」『中國文化一九八九』漢文學會會報第四七號⁸⁹⁾

b:「嵇康論(二)——答一郭詩」に見る自立の契機」『中國文化一九九〇』漢文學會會報第四九號⁹¹⁾

c:「嵇康の文學——「述志詩」における言志の様相——」『新しい漢文教育』第17號⁹³⁾

- d: 『魏晉文學研究——阮籍・嵇康の文學を考ふるための前提』(一九九二年度國內留學研究報告 提出先・私學研修福社會, 93)
- (2) たとえば、馬積高『賦史』(上海古籍出版社, 87) 一六五頁。
- (3) 「卜居」の作者をめぐっての議論は、藤野岩友『巫系文學論』(増補大學書房, 69) 一二二頁参照。
- (4) 花房英樹『文選四』(集英社, 74) 五八頁に、『世說新語』排調篇の、王子猷が謝安に七言詩句として「昂昂若千里之駒、汎汎若水中之鳧」を示した話を引く。この話をみても、無くてよい二句だと分かる。
- (5) 前出注(1) 武田論文参照。
- (6) 然而大道既隱、智巧滋繁、世俗膠加、人情萬端、利之所在、若鳥之追鸞、富爲積蠶、貴爲聚怨、動者多累、靜者鮮慮、爾乃思丘中之隱士、樂川上之執竿也。於是遠念長想、超然自失、鄙人既沒、誰爲吾質、聖人吾不得見、冀聞之於數術。
- (7) 匠石(石工)が自分の技能を信頼してくれていた郢人(左官)の死を嘆いた話のことよせて、莊子は惠施の死を嘆いた。この『莊子』徐無鬼篇にのせる故事を、嵇康は好んだようで、司馬氏に仕える兄密喜との別れに際しても、「贈秀才入軍五首」其四の中で、「鄙人逝矣、誰與盡言」と歌っている。
- (8) 前出注(1) 別稿。参照。
- (9) 清水茂氏は「正始の文章」の中で、「正始派」に比べて「竹林派」には「駢文への志向」が見られると指摘している(『小尾博士古稀記念中國學論集』汲古書院, 83)。
- (10) ④の智術をめぐる判断に關しては他に比べて少し慎重でなければならぬが、しかし(1)の宏達先生の説明で、「大道既隱、智巧滋繁」などと智を否定的にとらえているところからみて、やはり否定される生き方にとらえるのが妥當であらう。
- (11) この老莊の差については、たとえば武田秀夫氏は、老子は「道や玄の奥深き世界に思いを潛める靜的哲人」として、莊子は「道の體得者として、自在無礙にこの世に生きる人生の達人と動的に捉えられている」と理解する(前出注(1) 武田論文)。
- (12) 前出注(1) 別稿a参照。
- (13) 藤野岩友氏は「最後は……反語を混ぜた斷定の形になってゐるのである」とする(前出注(3) 同書二八七頁)。
- (14) 前出注(1) 別稿b参照。
- (15) 莊萬壽氏も『嵇康研究及年譜』(臺灣學生書局, 90) 一五三頁で「他所問的就是嵇康所面臨如何抉擇自己扮演的角色的問題、也是當時社會士人如何去選擇道路的問題。」という。ただし莊氏は十四箇條の各項をすべて並列的に分類しなおし、計十の處世の型として理解しようとしたが、「卜疑」を作品として考えようとするときには慎まなければいけない方法だと考ふる。
- (16) たとえば『晉書』文苑傳にのせる時人が張翰を許した「曠達」には、江東歩兵と言われたことからわかるように、明らかに阮籍のイメージが付與されている。なお「曠達」の語については、竺法深を許するときに用いられ、權貴にも動じない存在としてとらえられている。
- 司馬會稽王天性虛澹、與法師結殷勤之歡、師雖昇履丹墀、出入朱戟、淚然曠達、不異蓬宇也。
- 〔世說新語〕言語篇注引「高逸沙門傳」
- (17) 泰始初、詔曰、「……侍中・太尉何曾、立德高峻、執心忠亮、博物洽聞、明識弘遠、翼佐先皇、勳庸顯著。」
- 〔晉書〕何曾傳
- (18) 阮籍遭母喪、在晉文王坐近酒。司隸何曾亦在坐、曰、「明公方以孝治天下、而阮籍以重喪顯於公坐、飲酒食肉、宜流之海外、以正風教。」

〔世説新語〕任誕篇〕

何曾嘗謂阮籍曰、「卿恣情任性、敗俗之人也。今忠賢執政、綜核名實、若卿之徒、何可長也。」

〔同注引〕千寶晉紀〕

(19) 鍾會庭論康曰、「今皇道開明、四海風靡、邊鄙無詭隨之民、街巷無異口之議、而康上不臣天子、下不事王侯、輕時傲世、不爲物用、無益於今、有敗於俗。……今不誅康、無以清潔王道。」於是錄康閉獄。

〔世説新語〕雅量篇注引〕文士傳〕

(20) 前出注(1)別稿d參照。

(21) 「六朝美文論」(吉川幸次郎編『中國文學論集』新潮社、66)

(22) 前出注(1)別稿a參照。

(23) 夏明劍氏は、二五一年から二五三年、孫登に従って遊んだことをもとに制作したとする(前出注(1)譯注四一頁)。また莊萬壽氏は、二五五年、母丘儉、文欽の反司馬軍事行動の時局下の作品とする(前出注(15)同書一五三頁)。いずれも決め手にはならないようである。

(24) 前出注(1)別稿c。

※本稿は、一九九二・一九九三年度科學研究費による共同研究「漢魏六朝を中心とした辭賦、駢文の研究(分擔研究「阮籍、嵇康の賦」)」の報告書(94・3)に報告した骨子に基づき、新たに稿を起こしたものである。